

教員のメンタルヘルスを悪化させる要因には様々なものが考えられますが、今回は特に「子どもとの関係作り」に起因する2つのケースについて取り上げてみたいと思います。

指導に熱心になる前に「受けとめる」ことが大事

以下は、放課後、中学1年の男子生徒が、掃除をまぼって担任に呼び出された場面です。(担)は担任、(徒)は生徒です。

- (徒) 「どうして呼び出されたか、わかってい
- (徒) 「掃除をまぼったか
- (徒) 「沈黙」
- (徒) 「まぼったのは認め

心の悲鳴に耳を傾ける

が、正論だけで子どもに迫ろうとすると、ますます子どもは追いつめられ、話を聞いてもらった感覚にならな

子どもが何を聞き遂げる前に、教師の言うことを聞かせようとするから思いが通じない、つまり、その順序を守ることが大切

子どもから教わる時こそ自分が変わるチャンス

を、いつの間にか他の同僚がカバーしてくれていることなど知る由もなく、気分を悪くする。自分が「子どもを受け入れる」と子どもたちから「乗り越えられる」場合もあるようです。

教員は、子どもとうまく関係を築いているようです。その一方で、自分が「子どもを受け入れる」と子どもたちから「乗り越えられる」場合もあるようです。

からの「物言い」や「発想」が当たり前になり、いつの間にか「世の中の常識」からかけ離れてしまっていることがあるものです。しかも、50代を超える頃には、子どもとの価値観の溝は深まるばかりで、「今さら、自分を変えるのは、しんどい」と嘆く教員が増えて

- (徒) 「沈黙」
- (担) 「どうしてまぼったの？」
- (徒) 「べつに」
- (担) 「誰が悪いのよ？」
- (徒) 「うん」
- (担) 「先生が何か間違っ
- (徒) 《沈黙》
- (担) 「明日からどうするの？掃除やるの、やら
- (徒) 「うん」
- (担) 「早く自分で決めな
- (徒) 「さー！」

この例でも分かるように、確かに先生の言うことは間違っていないのです

職場に馴染めない教員の中に、子どもを「受け止められない」「自分のつづきも、子どもの前で謝れる

「教えること(指導)」子どもの関係作り」に起因する結果、できる子どもを自分の所まで「引っ張る」指導は得意なのですが、子どもの所まで「降りてい

その結果、できる子どもを自分の所まで「引っ張る」指導は得意なのですが、子どもの所まで「降りてい

そんな中から「指導を」いい加減にできない「思いの教員が「退職」を選択する

「あなた」「同僚」「部下」に黄色信号出ていませんか

教職に長く就いていると、自分たちの立場や役割

執筆 土井一博(どい・かずひろ) 日本教職員メンタルヘルスカウンセラー協会 理事長、川口市教育委員会